佐久穂町地域おこし協力隊　活動報告書

副島　優輔

2021年４月に３年間の地域おこし協力隊の任期を終えました。脱サラし、縁もゆかりもない地域への移住からスタートしたこの活動は、台風19号やコロナ禍という社会の前提条件が変わる事態とともにありました。私は特段スキルや資格があるわけでもなく、サバイバル能力が高いわけでもなく、東京で風を切って暮らしていたわけでもないので、「武器もない人が地方社会で生きていけるのか！」「小さい子どもが３人もいるのに大丈夫か！」とご心配いただくことも多々あります。

でも、我が家がここで暮らすことには、お金に換算できない価値があるように信じていて、それこそ不確実な未来を生きる子どもたちに渡したいバトンであり、私がこれからもこの地で挑戦し続けたいテーマでもあります。

しかし、これは一言では表現できず、私も伝える能力を持ち合わせていません。この価値観はこの町の人々と出会って暮らしていく中で徐々に教えていただいたものです。その過程をお伝えすれば、この地で暮らす人ならば言葉にしていただけるのではと思い、このような形にさせていただきました。

長文でダラダラと恐縮ですが、お読み頂けましたら幸いです。そして、もしこの長文苦行を終えた方がいたら、せっかくなのでお話がしたいです。本来でしたら活動報告会を行いたいところですが、コロナ禍で書面での報告という形になりました。読みづらいところがあると思いますがご容赦ください。

もくじ

子どもとつながりと　～佐久穂町に至るまで～　2

人が本来持っている良さ　～ふるさと CM 大賞～　2

多様な人がつながる　～仕事フェアとごはん会～　3

記録と記憶を継ぐ　～ふるさと CM 大賞～　4

経験からの学びを未来に　～あの日、区長は。～　5

オンラインでもつながる　～リモート発酵コミュニティ～　6

志を共に描く　～佐久穂と小海の合同研修～　6

地域経済で働く始まりと終わり　～就職と閉店～　7

終わりに　8

活動一覧　9

船木成記さんからのメッセージ　10

黛　史浩さんからのメッセージ　11

水嶋千春さんからのメッセージ　12

副島優輔

ミッション：移住定住支援など
任期：2018 年 5 月～2021 年 4 月

埼玉県川口市出身。テレビ番組制作の現場で、昼夜関係なくワーカホリック（仕事中毒）として働いていたが、身内の死や子育てをきっかけに人生を見つめ直し退職。地元の川口に戻り、小中学校での映像制作教育プログラムの運営や映画制作教室、ドキュメンタリー制作に従事。番組制作を通して、国内外のさまざまな生き方や働き方に触れ、子どもの小学校入学前に佐久穂町への移住を決断。3 児の父。

2018～2021 年　移住支援員　集落支援事業
2019～2020 年　長野県庁地域振興課　まちむら寄り添いファシリテーター養成講座　フィールドコーディネーター
2019 年～　長野県立大学ソーシャルイノベーション創出センター　東信地域コーディネーター

子どもとつながりと　～佐久穂町に至るまで～

移住に対して当初はまったく興味がありませんでしたが、仕事で多くの小学校と関わるなかで疑問に感じる場面に何度も出会ったり、子どもが保育園に入れなかったり、「子育てをする環境ってここでいいんだっけ？」という疑問が湧いてきました。

子どもが小学校に入ると移住しづらくなりそうな気がしたので、違う可能性を探していろいろな地域を見て回りました。最初は漠然としていましたが、各地域を見て回る中でだんだんと自分たちが移住先に求めるものがわかってきました。でも、どこも決定打に欠ける状況でした。そんな時に日本初のイエナプランスクールの開校計画があることを知り、そのコンセプトに興味を持ちました。結局、わが子は町立の小学校を気に入ったので応募しませんでしたが、これをきっかけに、埼玉県からのアクセスも良いし、町の規模なども自分の希望と合致していて、「移住するなら佐久穂町かもしれない」と思いました。

仕事に関しても、ちょうど行き詰まりを感じていたタイミングでした。教育と映像を掛け合わせた仕事で、埼玉県内の小中学校でニュースやCM作りを通したメディアリテラシー教育の授業を行っていました。この仕事は自分にはとても合っていたけれど、プログラムの内容が社会の変化に対応しきれていない気がしていて、根本的に変える必要があると感じていました。この社会を生きる子ども達に渡したいものは何かと考えたときに、それはこの仕事の延長線上にはありませんでした。

佐久穂町で地域おこし協力隊の募集があることを知り、企業に就職するよりも地域の暮らしを知ることができるのではないかとの思いで応募しました。山や川など自然とのつながりも大切だけれど、それ以上に子どもたちにはいろいろな人と接してほしくて、そんなつながりが生まれるといいなと思いました。収入はかなり少なくなるけれど、タイミングとしても今しかないと思い、佐久穂町への移住を決意しました。

人が本来持っている良さ　～ふるさとＣＭ大賞～

移住支援員として、移住ガイドブックの作成や空き家調査、移住イベントへの出展などの事業に携わりました。自分の移住においては、何が待っているかまったくわからなかったから緊張していたけれど、意外とすぐには何も変わりませんでした。地域との関係は時間をかけてゆっくりと作っていくものだとわかりました。近所の方々も、縁もゆかりもない知らない人間が引っ越してきたことに戸惑いがあったと思いますが、だんだんと顔を合わせることができて、とても親切に接してくれました。移住したばかりの頃に驚いたことと言えば、自転車で通勤する人が少なかったり、ゴキブリがいないこと。住居関係では賃貸物件の少なさや、空き家に使われることのない家具がそのまま置いてあること。子どものことで言えば、待機児童がゼロだったり、保育園には白米だけを持っていくこと。どれも新鮮な体験で

した。

ふるさとCM大賞は手伝ってくれと依頼があり、関わることになりました。こういう賞があることはもちろん、自治体がPRに力を入れなければならない状況にあることも知りませんでした。詳しい話を聞いてみると、CM大賞は毎年役場の新入職員が作っているとのことだったので、私は制作者ではなく会議の場を作ったり、考え方を案内する係になりました。前職のメディアリテラシー教育の現場で学んだ「ワクワクする瞬間の作り方や考え方」をもって制作を進めたところ、最優秀賞を受賞することができました。年間 365 本のCM放映に加えて、他の県でも放送してもらいました。新人職員と一緒に仕事をしてみて、彼らが多様な個性を持っていることを知りました。リーダーっぽい人、調整が丁寧な人、行動力がある人、アイデアがおもしろい人、年配の方とのコミュニケーションが上手い人、空気を読まないで立ち止まれる人、人に可愛がってもらえる人。彼らは社会人としては新人だけれど、さまざまな経験と個性を持っていました。彼らの個性や気づきを反映できるように、その可能性が広がるように、映像づくりの導きと会議の設計をしました。それで大賞を取るんだから、彼らはすごいです。私としては、「持っている魅力を引き出し、相互補完の良い関係を築きたい人だ」ということをわかってもらえる機会になったと思います。

ふるさと CM 大賞　授賞式

多様な人がつながる　～仕事フェアとごはん会～

2018 年10月に「パパママさくほの仕事フェア」というイベントを開催しました。株式会社吉本の関さんの普段の生活の紹介から始まり、町内の企業さんに自社の魅力を紹介してもらいました。個別相談の時間を少し取ったのち、実際に現場へ出て案内するという形でした。私が移住する時に求人情報だけではその企業のことがわからないと感じたことから開催しました。業務内容や給料も大事だけれど、「どんな人たちがどんな思いで仕事しているのか」を知りたいと思っていました。これをきっかけに就職したり、つながりが生まれた方が何人かいました。しかし、今振り返ってみるととても荒い企画でした。にもかかわらず、お付き合いいただいた企業の皆さま、参加者の皆さま、サポートしていただいた役場の皆さまには感謝しています。

さくほごはん会

同年３月と５月には「さくほごはん会」というイベントを開催しました。これは佐久穂町の美味しいものを、町内のいろいろな人と一緒に食べようと思って企画しました。子ども食堂と移住支援を組み合わせたような企画です。大日向小学校が開校するタイミングだったので、佐久穂町にすでに住んでいる人たちも新たに移り住んでくる人たちと知り合いたいし、移住してくる人たちも地域の人たちと知り合いたいと思っているけれど、そのきっかけがないという状態でした。この場を通じて出会い、今も遊び仲間になっている人がいるそうです。

記録と記憶を継ぐ　～ふるさとＣＭ大賞～

協力隊生活も２年目を迎え、少しずつ個人としてのお仕事をいただけるようになりました。協力隊になったと同時に個人事業主として開業していて、今後の定住に向けた活動も協力隊のミッションのひとつになっていました。協力隊のミッションにはいろいろな種類がありますが、佐久穂町の場合はメインのミッションである移住支援員だけでは任期終了後の仕事にはならないため、今後に向けて個人で仕事を受ける経験とネットワークを構築する必要がありました。映像制作のほかに、人や会社を結ぶような仕事、場づくりの仕事もいただくようになりました。同時に地区の役員や消防団といった役を引き受けるようにもなりましたが、これが大変でした。

２回目のふるさとＣＭ大賞は、前年とは異なるチャレンジをしました。町に残っているフィルムやテープを集めて、町の魅力をＣＭにするプロジェクトです。前回のＣＭ大賞では、町の魅力と言いながらも深く理解せずにメッセージにしてしまった感覚があり、「この町に住む人にとっての町の魅力とは」という部分を掘り下げるためには、町の記録（記憶）を知ることが有効なのではと思いました。フィルムやテープを公募しても集まらないので、口コミで探して回りました。「祭りとかでカメラを回していた人はいませんでしたか？」という怪しい質問を繰り返し、少しずつ映像が集まりました。そうして提供していただいたフィルムを新入職員とともに見ました。子どもの運動会、卒業式、誕生日。最初は他人の生活を見ていても退屈ですが、見続けていると不思議とその人の人生が自分に重なったり、その時代に生きている人の感覚を共有するような体験もありました。人は忘れたくない場面に出会った時、いつか記憶は薄れてしまうことを知っているから、記録として形に残すというある種当

たり前のことを体感しつつ、当時の記憶を共有させてもらいました。その感覚を持ち寄ってみんなで対話し、この町で暮らす人にとっての町の魅力を「この町に生まれて　いつの間にか年をとった　ここで過ごした当たり前が　私そのもの」というコピーにしました。

また、フィルムやテープの発掘過程で昔のカメラも発掘できたので、せっかくならばそれを使って撮影してみようということになり、およそ 50 年ぶりに動かした８mmカメラで撮影しました。そのカメラとフィルムを提供してくれた小須田さんは、時計屋さんだから機材の修理もできました。アジアで唯一の８mmフィルムの現像ができるお店が東京に１つだけ残っていて、そこで現像してもらい、佐久市のアーティストに作曲をしてもらって完成しました。今回は賞は取れなかったけれど、この企画に関わってくれた人が少しでもハッピーな気持ちになるプロジェクトにできたし、役場の新入職員にとっては、より深く「なぜこの町にいるのか」を考えたことは、この町の公共を担う上で良い経験になったのではないかなと思います。

２回目のふるさと CM 大賞　撮影風景

経験からの学びを未来に　～あの日、区長は。～

台風は突然やってきました。意外なほど静かにやってきました。私は消防団に入っているので召集がかかり詰所に待機。不安がっていた家族を残して出ていくのはとてもつらかったです。

役場では緊急体制となり、仲間の協力隊員が暮らす家も被災しました。地域おこし協力隊とか言っているのに、災害が起きてみると実際は何の役にも立っていなくて、自分の無力さを痛感しました。

発災後の数日間は消防団として、ボランティアとして泥出しを行いました。その中で、集落支援事業で関わっていた区長さんたちが地域のために奮闘している姿を目にしました。自身の家も被害に遭っているにも関わらず、他の人のために陣頭指揮をとっていました。

発災からひと月が経った頃、同じ協力隊の炭谷さんと話し合って、区長さんたちの動きを記録に残すことにしました。どういう形で発表するかはわからないけれど、この経験をちゃんと教訓にしなければならないと思いました。

区長さんに話を聞いて回ってみると、「自主防災組織が機能しなかった」「区長だから逃げるわけにいかない」「役場と区民の板挟みに」という私としては驚くような話ばかりで、これはしっかりと伝えなきゃと思いました。

こうして「地域の道しるべ新聞　～あの日、区長は。～」ができました。でも、全戸配布

は迷いました。取材に応じてくれた区長さんたちが批判される可能性があるからです。それにも関わらず、「教訓を伝えるため」とご理解をいただきました。皆さんの勇気ある決断に本当に感謝しています。復旧作業の真っ只中で取材をお願いするのは申し訳なかったけれど、時間が経つと細かいところは忘れてしまうし、「いつ逃げる決断をしたのか」などの細部が重要だとも思っていたので、あのタイミングでお話を聞かなければならなかったと今でも思います。大日向の区長さんとは炭谷さんが顔の見える関係になっていたのでお話を聞くことができた。それを考えると、この活動は地域おこし協力隊でなければ実現できなかったかもしれません。

地域の道しるべ新聞　～あの日、区長は。～

オンラインでもつながる　～リモート発酵コミュニティ～

コロナ禍も突然やってきました。あらゆるイベントが中止になり、協力隊もテレワークが主になりました。2020 年５月に、大日向で自主学童を運営する岩崎丈さんから「町のいろいろなところをコワーキングスペースとして使わせてもらって働くワーキングコミュニティを作りたい」という相談を受けて、mikko ドーナツ店主の塚原さんが発酵をモチーフにしたコンセプトを提案し、「リモート発酵コミュニティ　NUKADOCO（ヌカドコ）」が誕生することになりました。これは説明がとても難しいコミュニティなのですが、月に一回オンラインでブレインストーミング（アイディアをたくさん出してワイワイやる会議）をしたり、SNSでやりたいことを挙げて、それをやりたい人や応援したい人が集まってプロジェクト化したりしなかったりするコミュニティです。これまでに実行されたものは「リモート漬物作り」から始まり、「長めの自己紹介レディオ」「塩尻に学習ツアー」「オンラインスナック」「コミュニティ通貨」などです。オンラインとリアルを使い分け、今も発酵しています。

志を共に描く　～佐久穂と小海の共同研修～

佐久穂町と小海町が同盟を結び、合同で若手職員研修を実施することになったけれど、内容で迷っているとの相談を受けて、研修のノウハウも持っているし、CM大賞の経験から若手が持っている可能性を知っているので、参画させてもらうことになりました。

私は 1on1 ミーティング（個別面談を深くやるイメージ）を担当し、１人あたり１時間以上かけて対話し、仕事への思いを言葉にしていくお手伝いをしました。最初は自信がなかった彼らが、次第に自分が持っているものに目を向けて自信を得ていく姿は、見ているこちら

が眩しいほどでした。最後の成果発表会では、両町の町長と副町長の前で、町への思いを発表する場としましたが、自分の言葉で熱く語る姿はとても感動的でした。

小海町佐久穂町合同若手職員研修　修了式

地域経済で働く始まりと終わり　～就職と閉店～

コロナ禍の影響で、夏頃から動画制作の需要が高まっていました。NUKADOCO 仲間の岩崎さんの紹介で、株式会社東京装美という佐久市中込の内装屋さんから動画制作の依頼をいただきました。求人の動画を作って欲しいとのことでしたが、私としては動画を作ってホームページに載せるだけでは結果が得られないと思いました。有坂社長とお話する中で、「地元で働きたい若者の雇用の受け皿になりたい」という思いがあることを知り、高校への訪問を提案して一緒に回ることにしました。その中で、県立教職員は定期的な人事異動があり、地域企業や新しい時代の働き方に触れる機会が少ないため、キャリア形成指導の難しさを感じていることを知りました。高校としても、生徒たちに地域で働くことについて教えて欲しいとのことだったので、有坂社長による仕事に関する授業や職場見学を後押ししました。すると、前年まで０人だった応募が今年度は３人に増えました。また、創業以来初の女性職人も誕生しました。

2020 年の夏に、役場近くの 40 年続いたラーメン屋さんが閉店するという話を聞きました。大将とは縁もゆかりもなかったけれど、その働く姿を撮影できるのはこれが最後だと思って、閉店する日に密着で撮影させてもらい、その映像を DVD にしてプレゼントしました。この狙いは２つあって、１つ目は町の記録として残すこと。よく地域の方から昔の話を聞かせてもらうのですが、いまいち実感が持てないというのが正直なところでした。２回目のＣＭ大賞で当時の映像を見せてもらい、「本当にあったんだ」と実感できるようになったので、同じように現在の佐

久穂町の姿を未来に向けて残したかったのです。２つ目は人の輝く瞬間を記録し、その人らしさを大切にしてほしいということ。ちょっと暗い話で恐縮ですが、人の命には必ず終わりがあります。そして、その人がいなくても世界は回ります。人生の中で仕事にはお金を稼ぐ手段以上の価値があるように思うのです。仕事をしている時にはわからなかったけれど、無くなって初めてわかるその価値。セカンドキャリアでは生活が変わり、戸惑うことも多いと思いますが、新しい世界でもその人らしい別の形を必ず見つけられると思います。「迷ったときに戻れる場所＝映像」になれたらと願っています。

終わりに

ここまで読み進めていただき、ありがとうございます。活動を振り返ってみて、やはり一人でやったことはひとつもありませんでした。常に誰かに支えられて生きてきました（実はこの報告書も元小海町地域おこし協力隊の高橋涼さんと炭谷元隊員に協力してもらっています。本当にありがとう）。

何も一人でできないことが苦しい時もありました。不器用で失敗を重ねて、この社会でたくましく生きていく自信がどこか持てずにいました。でもこちらにきて、僕がどんな人間だろうと関係なく関わってくれる人々と出会えました。子どもたちが騒いでいても「子どもの声がして嬉しい」と喜んでくれる人々と共に暮らしています。そんな眼差しの中で生きていけるのは、私たち家族にとってかけがえのないものになりました。

昔から「将来の夢は？」という質問が苦手でした。自分と同じ何かをやりたい人がいたら、その人がやるべきだと思ってきました。誰かを蹴落として悲しませてでも自分がやりたいなんて思えませんでした。

しかしこの町では、消費行動ですら誰かのためになればと非合理的な選択をされている方々を多く見かけました。その点、私も「〇〇さんと一緒にやりたいことは？」という質問ならばどんどん湧いてきます。「やってもらったことをお返ししたい」とか、「〇〇しているとき、この人はキラキラしている」とか動機はいろいろです。

この３年間でやってきたことは、そうして顔を浮かべる中で生まれました。その道中では、自分では思ってもみなかった自分の個性が必要とされたり感謝されたりしました。人のためだと始めたことが自分にとって大切な場になっていました。

恩を返したいし他の方にも渡していきたいし、もっと多くの人と分かち合いたい、そう思うと協力隊の３年間では全然足りませんでした。任期後も私のようにひとりでは力を出しきれなかったり、居場所や役割を見つけにくい人とともにあろうと思います。これからも引き続きよろしくお願いします。

映像作品

ふるさと CM 大賞受賞「さくほっ手？」（ファシリテーション）

さくほりこれくしょん（ファシリテーション）

日本医科大学　痛みのセルフケア動画　（演出・撮影・編集）

自然と、ヨガ in 佐久穂　（撮影・編集）

まちむら寄り添いファシリテーター養成講座　記録映像　（編集）

NPO 法人ピースジャム　（編集）

株式会社カインズ　　カインズ TV アウトドア編　（演出・撮影・編集）

東京装美株式会社　（演出・撮影・編集）

新宿高野とのプルーン PR コラボ（演出・編集）

はまの暮らしの蛤浜（演出・撮影・編集）

宿岩ヘルスの会　DVD　（撮影・編集）

寄せ鍋コンサート DVD　（編集）

Mo‘Live DVD　（撮影・編集）

鳥川寛子先生フレイル予防 DVD　（ 撮影・編集）

大栄建設　求人訴求、ショールーム動画　（演出・撮影・編集）

軌道塾　（演出・撮影・編集）

イベント・紙媒体

2018 年 10 月	パパママさくほの仕事フェア
2018 年 12 月	自分の町を好きになる攻略本制作ワークショップ
	集落新聞創刊
2019 年 2、3 月	佐久穂町ごはん会
2019 年 6 月	大学生向け動画制作セミナー
2019 年 10 月	移住者交流会　冬の備え編
2019 年 11 月	出張ボランティアマッサージ
2020 年 2 月	「あの日、区長は。」発行
2020 年 3 月	おなっとう手帳（制作統括）
2020 年 3 月	小海町職員研修　（ファシリテーター）
2020 年 6 月	リモート発酵コミュニティ NUKADOCO
2020 年 7 月～ 2021 年 2 月	小海町佐久穂町合同若手職員研修

ふるさと CM 大賞受賞「さくほっ手？」（2018 年 9 月）

「さくほりこれくしょん」（2019 年 9 月）

新宿高野とのプルーン PR コラボ（2020 年 9 月）

はまの暮らしの蛤浜（2020 年 11 月）

パパママさくほの仕事フェア（2018 年 9 月）

小海町佐久穂町合同若手職員研修（2020 年 7 月）

一般社団法人つながりのデザイン代表理事
長野県学びの県づくりアドバイザー　船木成記さんから

副島さんと初めてお会いしたのは、今から３年前、私が長野県の参与をしながら NPO 法人 ETIC の事業の、ローカルベンチャーラボ というプログラムの「安心豊かな暮らし創造」コースのメンターをしていた時のことでした。全国から社会人や学生が集まり、半年間月に一度集まり、学び合うプログラムで、その二期生 9 名のうちのお一人でした。まさに、彼が地域おこし協力隊になり、佐久穂町に家族で移住されたばかりで、これからの人生のデザインを改めて始めるぞというタイミングで。私は「なんで佐久穂町の地域おこし協力隊に？」「なんで映像の仕事を辞めて？」と聞くと、彼は「このまま都会にいて、満足いく子育てができるのかと疑問に思ったから」「映像制作の仕事は昼夜別なく、時間も不規則で家族の時間も取れないから不安」「佐久穂町には新しい魅力的な小学校が準備中で、そこをなんらかの形で手伝えたら」と話してくれました。そして「でも、地域おこし協力隊のミッションを果たしながら、その後につながる生業はどうするの？」とお聞きすると「それを考えるために、このコースに来ました」（私は「それは責任重大だ」と思ったことを、今、書きながら思い出しました（笑））。その時、重ねて「映像の仕事はどうするの？」と聞いたところ「足を洗おうと思います」と。なるほど、同じような業界（船木は広告の仕事で、CM などの制作畑ではなくマーケティングが専門でしたが）で働いている私は、その気持ちもよくわかりました。本当に時間が不規則なんですね。「でも、これからは映像、ヴィジュアルの時代だよ、特に地域では、映像やファインダーの力で地域をファシリテートすることが望まれる時代がもう、目の前だよ」と話したことを覚えています。まだ、私たちが新型コロナに出会う前でありましたが、少し前から都会を離れ、地域をデザインする仕事をしていた私は、実は、映像が地域の人の笑顔を創り出すことに気がついていました。その後、会うたびに、試行錯誤しながらご自身の方向性を探っていた中で、やはり映像の仕事も始めたとお聞きして嬉しく思っていたところ、佐久穂町の CM で賞を獲ったとお聞きして「さすが＆よかった！」と安堵したことを覚えています。また、前後して、長野県立大の東信地域のコーディネーターに就いたり、役所のみなさんとの信頼関係を深めてゆく姿を拝見して、本当によかったなぁと思っていました。そして、昨年度末には、佐久穂町と小海町の合同の研修に船木を講師として呼んでいただき、両町の職員の方々との学びの機会をプロデュースしていただきました。素直に「すごいなぁ、地域おこし協力隊の人が行政の研修を設計してる。そこまでの信頼関係がこの短い時間で作られているんだ」と驚いたところです。この３年間、付かず離れずの距離感で、色々な機会でご一緒させていただいたことにより、船木が感じる副島さんの魅力は、熱血系のグイグイいくタイプというよりは、どこか飄々としながらも、そして、自分自身も試行錯誤しながらも、地域の方々や仲間と一緒に悩み、考え、行動してゆく、寄り添う姿勢なんだろうと思います。そして、その時に映像を活用しながら、もしくは、映像を作成する時に必要な視点（当事者性を持ちながらも、客観的な眼差しも）で語りかけ、関わるみなさんをつないでゆく行為にこそ、信頼の源があるんだろうなぁと思っています。これは、きっと、副島さんのオリジナルな強みだと思います。ヴィジュアルという言葉は、目に見える形にするという意味でもあります。人の行為や地域の活動を見える形にすることを通じて、地域の未来をデザインしてゆくことが、きっと副島さんの強みであり、これからも、もっと期待される役割なんだろうと思います。素敵な出会いをされた佐久穂町と副島さんの関係性に、心から敬意を表するとともに、これからの副島さんの活動に期待していますし、応援したいと思っています。そして、最後になりましたけれど、素敵な素直なお子さん達と、少し悩みすぎたり時に優柔不断なところがあるかもしれない（笑）副島さんを、しっかりと支えている奥さんである、久美さんに、心から拍手を送りたいと思います。みなさんでこれからも、笑顔あふれる毎日を！

佐久穂町総合政策課政策推進係　黛　史浩さんから

一緒に集落支援事業に関わったことをきっかけに、よく話すようになりました。副島さんは話すのが上手だから、集落の中で地区の人と話をするときに力を借りました。毎月１回定例のミーティングがあり、そこに加わってもらって集落の未来をどうするか考える。前例踏襲ではただ衰退していくだけなので、まだ人の力があるうちに仕事の見直しや今後どうするかなどを地域の人に集まってもらって話し合う。「実はこんなことを考えている」「私もそう思ってました」「じゃあ一緒にやりましょう」みたいな対話の場を作っていきました。思い返すと最初のうちから、今につながるような司会とかファシリテーターとかをたくさんやっていました。副島さんは対話を通して、その人の考えを引き出すことが得意なんだと一緒に仕事をして見えてきました。

副島さんがよく言っていた「人のため」。その最たる例が、２年目に発生した台風 19 号だと思います。「時間が経つと消えちゃうから、災害の記録は今残さなきゃダメだ」と言って、炭谷さんと二人で区長さんにインタビューして新聞を作っていました。また、被災した人たちの見守りや支え合い、ボランティアの方にも強く入っていました。被災者の疲れた体を癒すためにボランティアでマッサージ師を呼んで、心と体のケアをやっていました。これは行政ではできない動きでした。同時に、副島さんは行政に対する「被災者へのケアが不足しているんじゃないか」という不満があったのかもしれません。

若手職員研修を進めていくなかで、副島さんがトンネルを抜けた風に見えた瞬間がありました。それはコーチングや人育てが自分の仕事のひとつとして見えたからなんじゃないかと思います。それが見える前はもしかしたら役場に対する不満があって、つまらないと感じていたかもしれません。その頃は役場と一緒に何かをやることがありませんでした。役場はどうしても「協力隊は起業」という方向で考えてしまって、「自分の起業のために自由に使っていいよ」と時間を渡すんだけれど、これだというものが見えていない時には、少し孤独感があったかもしれません。

副島さんはよく「なんでそう思うんですか？」って聞いてくるんです。その質問攻めに対して、しっかりと答えられるように自分の考えを持とうと思うようになりました。質問するってすごく大事なことだと思います。自分が何のためにこれをやっているのか、そこを深く考えないといけないと思うようにもなりました。副島さんのような、改めて考えさせられる疑問を投げかけてくる人は役場の中にはいません。計画と考えの甘さにいつも気付かされます。それと、トライアンドエラーの考え方。「考えてばかりじゃ無駄ですよ。プロトタイプを作ってやってみないとわからないんだから、まずはやることですよ」とよく言われて、それも心がけています。

最後に、これからも佐久穂町との付き合いは続けていくと思うので、今後もよろしくお願いします。

元・佐久穂町総合政策課政策推進係　水嶋千春さんから

初年度から移住定住支援や空き家の掘り起こしを一緒にやりました。これは私も異動になったばかりで初めて担当した事業で、仕組みもない中で一緒にやっていたので、結構迷惑をかけたというか、一緒に考えながら進めていきました。大日向小学校の開校という佐久穂町にとって大きな波がきているところで、新しく移住ガイドブックを作ったり、ホームページを立ち上げたりと新しいこと尽くしでした。実際かなり大変で、協力隊の皆さんにはたくさん支えていただきました。

副島さんは、必要だと思うことをすぐに動いてやってくれていて、とても助かりました。しかも、一人ではできないことでも、担当者などいろいろな人に声をかけて動かしていくんです。現在は佐久穂町と小海町が合同で行っている就職説明会も、元は副島さんが企画したパパママ仕事フェアです。ごはん会も副島さんが自分で動いて、行政がフォローするわけでもなく、副島さんのネットワークで幅広く声をかけてくれました。そこに大日向小学校に入学する保護者の皆さんが参加して、40 人くらいの規模の大きな集まりになりました。行政としてもこれは必要だなと思い、その翌年度からは町主催でやっています。雰囲気づくりが上手で、「これは必要なことだよね」という共感をつくるところから始めて、企画の最初の起点になってくれました。もしかすると、町の職員も必要だとは思っているけれど動けない状況を見て、副島さんが拾って発言してくれていたのかもしれません。行政にとって、そういうゼロをイチにすることは時間もかかってしまうし難しいことで、それを力づくでもなく自然に進めてくれました。

最初はどういう人かわからなくて、第一印象は掴みどころがない謎の人でした。段々と副島さんの人柄がわかってきて、若手職員研修をお願いしました。この若手職員研修は副島さんの仕事のなかで、一番印象に残っている仕事です。組織づくりや人づくりといった副島さんの今後につながるものになるんだろうなと思いました。

副島さんには３年間、とても助けていただきました。今後も佐久穂町役場と関わりのある形で地域に残ってほしいと思っています。